



上図から月別漁獲量の変化をみると両地区とも3月～6月にかけて増加傾向を示し、その後横這いし漸減する。漁業種類別の漁獲量の変化を勝連漁協についてみると、昭和46年底延縄8.1.9%、追込網9%、刺網8.5%、其の他0.6%であった。昭和47年も傾向は変わらずや底延縄が減って5.8.2%、刺網、追込網がそれぞれ2.4.6%、1.4.6%と若干増加した。建干網2.5%であった。糸満漁協について漁業種類別漁獲量を見ると釣漁業主体の業態のため底延縄漁業による漁獲が昭和45～47年を通して97%台と高い割合を示す。以上のことから県全体のハマフエフキ生産の漁業種類別漁獲比率はここ数年来底延縄漁業の増加が目立ってきていることなどからも延縄による漁獲が50～90%、一本釣、刺網、追込網等で10～30%、其の他雑漁業の順となっている。

3) 漁期及び漁場

沖縄南部の金武湾、中城湾及びその隣接海域において操業している主な漁業の実態を図-7に示した。その主要事項や漁期、漁場について要約すると次のとおりであるが、沖縄の沿岸漁業は或る幾つかの例を除いては周年操業形態が多く亜熱帯地域の特異性がみられる。

a 一本釣漁業

湾内での一本釣漁業は殆んどないが、湾外の沖縄本島南部地先では周年操業されている。漁場水深は50～200mで底質は貝殻混りの礫地帯及び岩礁の近い周辺当りが主漁場でフェフキダイ、フェダイ、ハタ類等が主な対象漁獲物となっている。

b 底延縄漁業

漁期は一本釣同様周年行なわれているが中城湾の一部地域においては図-7に示す通り水深10～30mのごく浅海域で底質は砂泥質及び貝殻混りの礫地帯で4月～6月の間ヘダイ、キヂヌ（俗称チンシラー）、イトヨリダイ、コロダイ等の漁獲で盛況を呈するがその他の漁期は中城湾、金武湾共に水深30～60mのやや深みに移行し、岩礁又はその周辺海域で操業することが多い。漁獲物はハマフエフキを始めフェフキダイ類、ハタ類、アジ類等が主体をなす。

c 刺網漁業

湾内で操業している刺網漁業は主として三枚刺である。漁場水深は10～30mで底質は砂及び砂泥地が操業上効率の良い漁場となっている。漁期は周年可能であるが、夏場は漁獲物の鮮度が低下することから県では6月～9月まで禁漁期を制定している。主な漁獲物は、フェフキダイ類、ドロクイ、ダツ、ガザミ等である。

d 建干網漁業

この漁業は、湾内の10m以浅の比較的浅海域で行なわれている。漁場は潮流の緩慢な水

域で底質はサンゴ礁地帯又はそれらに近い所が選定され漁期は周年行なえることもあって割合安定した漁業と言える。主な漁獲物はアイゴ、ベラ、フェフキダイ類、アジ類、アオリイカ等である。

e マス網漁業

改良マス網は、昭和46年に導入されて以来金武湾、中城湾で操業しているが漁獲効率がよく、周年操業できるとあって経営は安定している。しかしながら漁場の底質は砂又は泥等で網地の破損の少ない所で潮流の緩慢な水域が網の張込上絶対条件となっているため漁場選定にはかなり制約を受けている。対象魚種はフェフキダイ類、アジ類、ダツ等が主体をなす。

f 追込網漁業

湾内での追込網漁業は、図-7に示す水域で操業している。漁場水深は5~2.0m程度、底質はサンゴ礁地帯かその周辺で行なわれているが、引網や敷網等で操業出来ないところでも行なえるのがこの漁業の特徴で漁期は1~9月であるが盛期は5~8月である。主な漁獲物はベラ類、フェフキダイ類であるがその他イカ類も含め多数の魚種が漁獲される。

図-7 漁期 および 漁場

